

スペイン語における WH 島内部からの WH 要素の抽出移動について

石 岡 精 三*

Some Notes on WH-Movements from WH-Islands in Spanish

Seizo ISHIOKA

Key Words: Adjunction, Lexical Agr, Relativized Minimality

0. はじめに

本稿は、スペイン語における WH 島内部からの WH 要素移動の挙動を考察する。以下の(1-2)で示されるように、WH 島内部から抽出される要素の類別とその文法性判断が連動する。本稿では、この相違を説明すると考えられる論法が提示される。¹⁾

- (1) a. *quién no recuerdas cuándo llegó a este país?* (Suñer 1992: 40a)
'who don't you remember when s/he arrived in this country?'
b. **cuándo no recuerdas quiTn llegóa este país?* (Suñer 1992: 47a)
'when don't you remember who arrived in this country?'
- (2) a. *quién no sabes cuánto pesa?* (Torrego 1984: 40)
'who don't you know how much s/he weighs?'
b. **cuánto no sabes quién pesa?* (Torrego 1984: 43)
'how much don't you know who wighs?'

Fukui and Speas (1986) の Relativized X'理論によれば、X'レベルまで投射されるのは機能範疇 (Functional Category) に限定される。一方、語彙範疇 (Lexical Category) は X'レベルまで投射される。結果として、機能範疇と異

原稿受付：平成5年5月26日

*長岡技術科学大学語学センター

なり、語彙範疇は SPEC 位置を持たないことになる。また、Kuroda (1988), Koopman and Sportiche (1991) と Sportiche (1988) によれば、主語 NP* は VP 内部に基底生成される。つまり、V が基底生成された位置から移動する場合の SVO 語順における主語 NP* は基底生成された位置から他の位置へ移動することになる。更に、Contreras (1991) は、少なくとも pro-drop 言語であるスペイン語において、[+Finite] CP 中の Agr が [+Lexical] の素性を持つと考える。²⁾つまり、スペイン語における Agr は SPEC 位置を持たないと考えられる (AgrP でなく、Agr' まで投射される)。それでは、スペイン語の SVO 語順における主語 NP* はどの位置へ移動するのだろうか。当該語順が embd. CP 中でも観察される以上、主語 NP* の SPEC(C) 位置への移動は想定不可能であろう。³⁾スペイン語において、[±Finite] CP 中の V は Agr 位置まで義務的に主要部移動すると考えられる。結果として、主語 NP* は Agr' 位置へ付加移動することになる。

本稿では、スペイン語における主語 NP* の Agr' 位置への付加移動を WH 要素移動へ拡張することにより論が展開される。つまり、ある一定の条件の下で、Agr' に支配された位置に生成される WH 要素の当該 Agr' への付加移動が義務的に発動すると考える。⁴⁾最終的に、本稿の対象となる WH 要素移動は ECP、特に原初痕跡に対する主要部統率 (Head Government) の成立要件によって説明される。また、この主要部統率の成立要件は移動経路理論に還元される。

第1節では、Contreras (1991) の概要が示される。第2節では、WH 付加語の生成位置、WH 要素移動と相対化された最小条件 (Relativized Minimality) との関連が検討される。第3節で、スペイン語における WH 島内部からの WH 要素移動を説明する Suñer (1992) の論法が検討され、その問題点が指摘される。第4節では、代替論法が提示される。第5節は結語を構成する。

1. Contreras (1991) の概要

前述のように、Contreras (1991) はスペイン語 Agr を [+Lexical] と指定する。⁵⁾結果として、当該 Agr が SPEC 位置を持たないことになる。以下の(3)を検討する ((4) は対応するフランス語用例)。

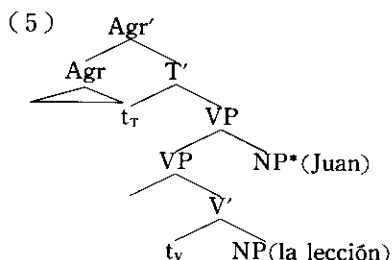
(3) a. sabe la lección Juan

b. * sabe Juan la lección ⁶⁾

c. Juan sabe la lección 'John knows the lesson'

- (4) a. *sait la leçon Jean
 b. *sait Jean la leçon
 c. Jean sait la leçon

(3a)の主語 NP* (Juan) は, (5)の構造で示されるように, VP に右方付加した位置に基底生成される((3b)では, VP に左方付加した位置に生成される。より厳密には, V が [+Lexical] の素性を持つため, V' に右方, あるいは左方付加した位置に生成されると考えなければならない)。



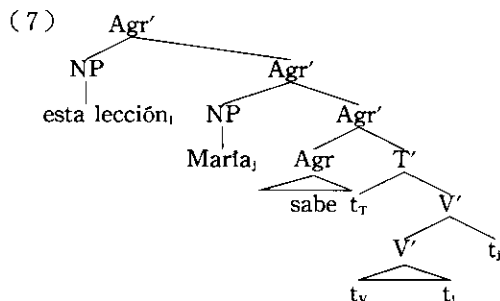
前述のように, スペイン語の [±Finite] CP 中の V は Agr 位置まで移動する。V', T' は「障壁」(Barrier, bar. と略記) を構成しない (Lexical Agr と T はその sister を L 標示する)。よって V が T を経由して Agr 位置へ移動することにより生成された動詞形態は基底生成された位置にある主語 NP* を統率し, 主格 (Nominative) を付与する。つまり, [+Lexical] Agr は基底生成された位置にある主語 NP* を統率し, 主格を付加可能である。一方, pro-drop 言語に属さないフランス語の Agr は [-Lexical] Agr と指定される。つまり, SPEC (Agr) 位置が存在する。この場合, V が主要部移動した Agr は, 基底生成された位置にある主語 NP* を統率するが, 主格を付与することはない(これにより, (4a-b) の非文性が説明される)。Case Filter の要請から, 主語 NP* は格が付与される位置 (SPEC (Agr)) へ移動する。(4c) で示されるように, 当該 SPEC 位置へ移動した主語 NP* は, SPEC-HEAD Agreement により主格を付与される。(3c) はどのように生成されるか。前述のように, 主語 NP* の SPEC (C) 位置への移動は許容されない (機能範疇 C はその sister 位置にある Agr' を L 標示しないため, 当該 Agr' は bar. を構成する)。動詞変化形 (sabe) との位置関

係から、当該主語は Agr' へ付加移動すると考えられる(本稿でも、同様の前提が設定される)。つまり、(3) 中の主語 NP は、基底生成された位置とそれが移動した位置の双方において、付加語 (Adjunct) と言うことになる。

次に、一般的に話題化 (Topicalization) の事例と考えられている用例 (6) を検討する。Contreras (1991) は、Rochement and Culicover (1990) と同様に、話題化を WH 置換移動でなく付加移動と前提する(この場合、Agr' への付加が前提される)。

- (6) a. *esta lección María sabe muy bien (Contreras 1991: 7a-c)
 'this lesson Mary knows very well'
 b. *esta lección sabe María muy bien
 'this lesson knows Mary very well'
 c. *esta lección sabe muy bien María
 'this lesson knows very well Mary'

つまり、(6a) に対して (7) の構造が想定される。



ここで、主語 NP (María) と話題化 NP 要素 (esta lección) が共に Agr' に付加している点に留意されたい。如何にして、(7) の構造が排除されるのであろうか。ここで、本稿で採用される適正統率と先行詞統率に関する相対化された最小条件 (Relativized Minimality, RM と略記)、更に先行詞統率の定義を示す。

- (8) X is properly governed iff (a) and (b):⁷⁾
 (a) X is canonically head-governed;
 (b) X is antecedent-governed.
- (9) X antecedent-governs Y only if there is no Z, Z (X⁰, *Adjunct*, A-Specifier, and A'-Specifier) such that
 (a) Z is a typical potential antecedent-governor for Y, and
 (b) Z c-commands Y and does not c-command X.⁸⁾
 (adapted from Ouhalla 1990)
- (10) X antecedent-governs Y iff
 (a) X and Y are coindexed
 (b) X m-commands Y
 (c) no barrier intervenes
 (d) Relativized Minimality (RM) is respected.
 (adapted from Ouhalla 1990)

定義(9)により、(7)において Agr'位置に付加した主語 NP (*Marta*) は t_i に対する RMB (RM Barrier) となる。つまり、 t_i は先行詞されないことになる。結果として、NP (*la lección*) の Agr'位置への付加移動が排除される。(6 b-c)においても、基底生成された位置にある主語 NP* (*Marta*) は t_i に対する RMB となる(t_i は適正統率されない)。つまり、(6a-c)の用例はすべて ECP(空範疇原理)によって排除されることになる。⁹⁾¹⁰⁾

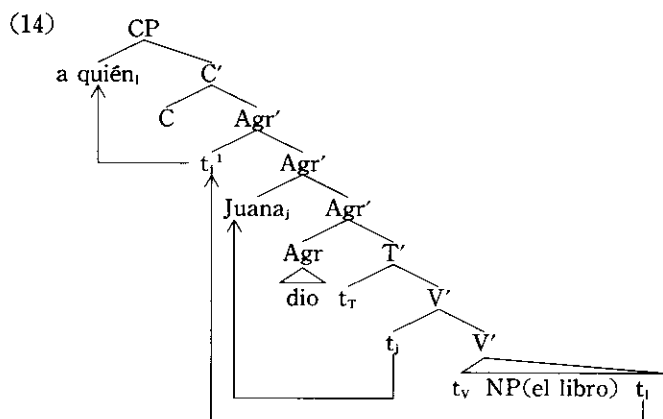
2. WH 付加語と Relativized Minimality (RM)

以下の用例を検討する((11-12)と(13a-b)は, Groos and Bok-Bennema (1986)による)。最初に、主語 NP* の Agr'位置への付加移動が許容されない用例(13)を検討する(WH-Adjunct (*dónde* (*where*)))は後述する)。

- (11) a. por esta razón Juana se fue a las Canarias
 'for this reason Juana went to the Canary Islands'
 b. ayer Juana se fue a las Canarias 'yesterday Juana went ...'
 c. así Juana se fue a las Canarias 'this way Juana went...'

- (12) a. por qué Juana se fue a las Canarias?
 ‘why did Juana go to the Canary Islands?’
 b. cuándo Juana se fue a las Canarias? ‘when did Juana go…?’
 c. cómo Juana se fue a las Canarias? ‘how did Juana go…?’
- (13) a. *a quién Juana dio el libro? ‘to whom did Juana give the book?’
 b. *con quién Paco vendrá hoy? ‘with whom will Paco come today?’
 c. a quién dio Juana el libro?
 d. con quién vendrá Paco hoy?

本稿では、Agr'の下位位置に生成される WH 要素の当該 Agr'への付加移動が義務的に発動すると前提される (cf. Goodall 1992). Contreras (1991) と同様に、主語 NP*の付加移動が WH 移動に先だって適用されると考える。結果として、(13a) の派生構造として以下の (14) が想定されることになる。(14) の構造は、話題化の構造(7)に類似する。¹¹⁾主語 NP (*Juana*)は t_i に対して RMB を構成する。つまり、 t_i が t_i' によって先行詞統率されないため、(13a)は空囀原理 (ECP) に抵触する。結果として、(13a)は非文と予測されることになる。



(13c)の文法性は、基底生成された位置にある主語 NP*が t_i に対する RMB を構成することを排除する ((12b)でも同様である)。(13c)の派生構造において、WH 要素の中間痕跡 (t_i') と基底生成された位置にある主語 NP*が隣接し

ない点に留意されたい(両要素の間には少なくとも、動詞変化形(*dio*)が介在する)。ここで、以下の仮説を設定する。¹²⁾

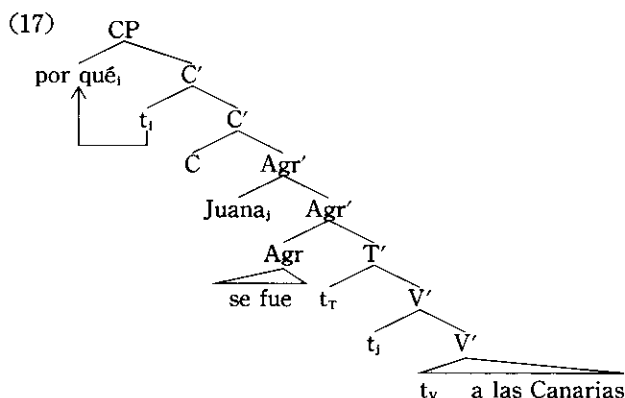
(15) Hypothesis:

With respect to a WH-adjunction intermediate trace (t'), RM applies iff the trace and a potential adjunction RMB for the original trace (t) are adjacent to each other.

上の論法は、(12)の用例を説明するであろうか。少なくとも、WH-AdjunctがAgr'の下位位置に生成されると前提した場合には、問題が惹起する。(12)がすべて非文と予測されることになる。この問題は、(12)に対応する(11)の用例と副詞(*entonces* (*then*))の用例(16)を検討することにより打開されるであろう((16)は、Harmer and Norton (1973: p.480-481)による)。

- (16) a. **la moribunda entonces dijo al doctor*
 b. *entonces la moribunda dijo al doctor*
 c. *la moribunda dijo entonces al doctor*
 d. *entonces dijo la moribunda al doctor*
 'then the dying woman said to the doctor'

(16a)は、副詞(*entonces*)がAgr'に左方付加した位置に生成される可能性を物語る。この場合、主語NP* (*la moribunda*)のAgr'位置への移動は排除される(当該副詞が主語痕跡に対するRMBを構成する)。(16b-c)は、副詞(*entonces*)がT',あるいはV'に左方付加した位置に生成される可能性を示す。副詞が文頭に生起する(16b,d)と(11)は、当該副詞が他の位置にも生成可能であることを示すであろう。本稿では、当該副詞がC'に付加した位置(この場合、C'に左方付加した位置)に生成可能と想定する。この論法は、上の(16b,d)と(11)の用例を説明するであろう。当該副詞に対応するWH付加語もまた、C'に付加した位置に生成可能と考えられる。結果として、(12a)の派生構造として、以下の(17)が想定されることになる。¹³⁾



(17)において、主語 NP* (*Juana*) の Agr' 位置への付加移動を阻止する要因は存在しない。よって (12) は文法的と予測される (主語 NP* が基底生成された位置にある場合も文法的と予測される)。

最後に、WH-Adjunct (*dónde* (*where*)) と V に θ 統率される WH-Argument の用例を検討する。

(18) a. **dónde* Bertha compra el periódico? (Goodall 1992: 5a-b)

b. *dónde* compra Bertha el periódico?

'where does Bertha buy the newspaper?'

(19) a. **qué* puesto Josefina tiene en la empresa? (Goodall 1992: 4a-b)

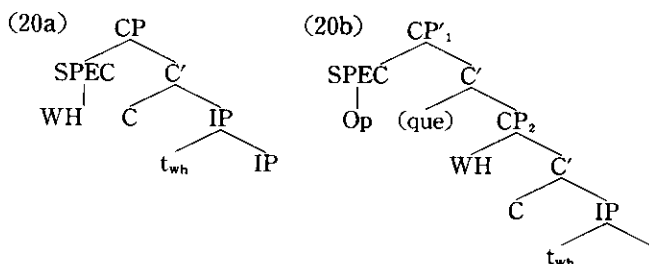
b. *qué* puesto tiene Josefina en la empresa?

"what position does Josefina have in the company?"

(18) の用例からも判明するように、WH-Adjunct (*dónde*) の生成位置として C' に付加した位置を想定することはできない。当該 WH 要素は、少なくとも Agr よりも下位にある X' 範疇に付加した位置に生成されることになる (これにより (18a-b) の相違が説明される)。また、(19) の用例は、原初痕跡 (*t*) が θ 統率される場合でも、WH 要素の Agr' 位置への付加移動が義務的に発動することを示すものと考えられる。

3. Suñer (1992) の論法

Suñer (1992) は, Chomsky (1986) の Barriers 理論を修正した Frampton (1990) に基づいて WH 島内部からの WH 要素の抽出移動を説明する。また, 間接疑問文は, Semi-Question (SQ) と狭義の Indirect Question (IQ) に分類される。Suñer (1992) は, SQ と IQ それぞれの CP 構造として, (20a-b) を想定する (Suñer 1992: 45, 48).¹⁴⁾



具体例として, 以下の (21-22) を検討する ((21) は本稿の (1)). (21) と (22) の matrix V はそれぞれ, SQ と IQ を導入する。

- (21) a. *quién no recuerdas cuándo llegó a este país?*¹⁵⁾
 ‘who don’t you remember when s/he arrived in this country?’
 b. **cuándo no recuerdas quién llegó a este país?*
 ‘when don’t you remember who arrived in this country?’
- (22) a. **qué te preguntas dónde compró Luis?* (Suñer 1992: 42a-b)
 ‘what do you wonder where Luis bought?’
 b. **quién preguntaste si llamó por teléfono?*¹⁶⁾
 ‘who did you ask whether telephoned?’

(21b)において, 長距離移動する WH-Adjunct (*cuándo*) が embd. IP に付加移動しないと考えてみよう。その場合, IP の「阻止範疇」(Blocking Category) 性により, 直接上位の CP と更に上位の最大範疇が bar.性を受け継ぐことになる。つまり, WH 要素移動は, Escape-Hatch として, IP に付加移動することになる (義務的)。また, この IP への付加移動は, 付加移動に対する条件

(HGCA)に抵触しない。当該 embd. IP 位置へ付加移動した中間痕跡(t')もまた、適正統率されなければならない。Suñer (1992) と Frampton (1990) においては、WH-Argument の中間痕跡は規範主要部統率され、WH-Adjunct の中間痕跡は先行詞統率されなければならないと前提される。また、embd. IP に付加した WH 要素はその後一挙に最終着地点 (matrix SPEC (C)) まで移動すると考えられている(当該移動経路上に bar. が介在しない)。(21b)において、長距離移動する WH-Adjunct の中間痕跡は最終着地点にある要素によって先行詞統率されない (embd. SPEC (C) 位置へ移動した WH-Argument (*quién*) がRMBを構成する)。つまり、(21b) は適正統率に抵触し、非文と予測される。一方、(21a) ではこの種の問題が起こらない。長距離移動する WH-Argument の中間痕跡は、matrix V によって規範主要部統率される ((21) における原初痕跡 (t) は適正統率される)。

(22) のように、matrix V が IQ を導入する用例では、長距離移動する要素の如何に関わらず、WH 島内部からの WH 要素の摘出が排除される。長距離移動する要素が WH-Adjunct の場合には、上の(21)と同様に非文と予測される。WH-Argument が長距離移動する場合にも、中間痕跡が適正統率(matrix V による規範主要部統率)されない。(20b)の構造に留意されたい。CP₁の主要部はその sister である CP₂ を L 標示しない (CP₂=bar.)。この CP₂ の bar. 性は、順次上位の最大範疇へ受け継がれる。よって、matrix V は WH-Argument の中間痕跡を規範主要部統率することはない。結果として、(22)は共に非文と予測されることになる。

しかしながら、Suñer (1992) の論法は問題を惹起する。Suñer (1992) の論法は、以下の (23b) と (24b) を文法的と予測する。

(23) (Torrego 1984: 52a-b)

- a. cuál de las maletas no sabes si Juan habrá pesado ya en el aeropuerto?
'which one of the suitcases don't you know if John has weighted yet at the airport?'
- b. *cuál de las maletas no sabes quién pesó en el aeropuerto?
'which one of the suitcases don't you know who weighed at the airport?'

(24) (Torrego 1984: 68-69)

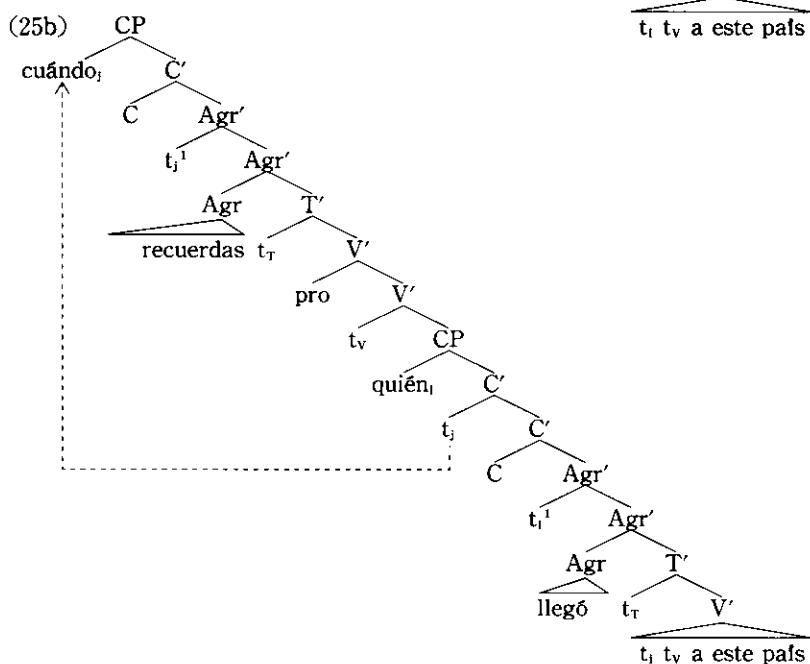
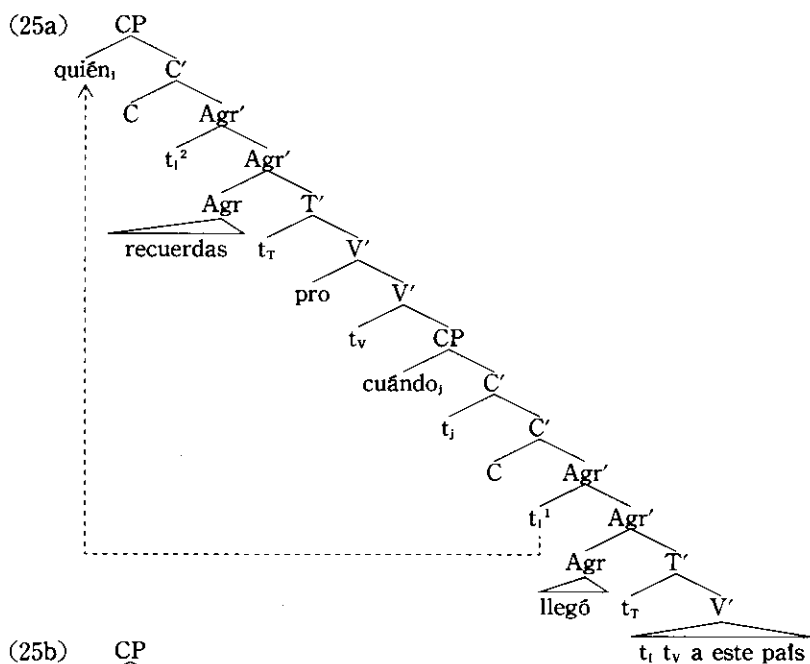
- a. *quién no recuerdas qué película dirigió en el cincuenta y uno?*
'who don't you remember what movie directed in '51' ?'
- b. **qué película no recuerdas quién dirigió en el cincuenta y uno?*
'what movie don't you remember who directed in '51' ?'

(23-24) 中の matrix V は SQ を導入する。つまり、(21) を説明する論法は (23-24) をすべて文法的と予測する。明らかに、この予測は事実と反する。以上のように、Suñer (1992) の論法は問題を内包するものである。

4. 代替論法

前述のように、本稿では、Agr'よりも下位位置に生成される WH 要素の当該 Agr'位置への付加移動が義務的に発動すると前提される。最初に、本稿の(1)に対応する(21)を検討する(便宜上、再掲する)。(21a-b)のS構造として、以下の(25a-b)が想定される。

- (21) a. *quién no recuerdas cuándo llegó a este país?*
'who don't you remember when s/he arrived in this country?'
- b. **cuándo no recuerdas quién llegó a este país?*
'when don't you remember who arrived in this country?'



(25a-b)のS構造において、*qué*と*cuándo*の移動経路上にはbar.が介在しない。よってSubacencyが満たされる。仮に、上の(25a-b)のS構造が同時にLFであると考えてみよう。¹⁷⁾(25a)の*qué*₁の痕跡(t_1, t_1^1, t_1^2)と*cuándo*₁のそれ(t_j)は適正統率の中の同定条件(8b)を満足する。((25b)の痕跡もすべて、(8b)を満足する)。認可条件として(8a)についてはどうか。 (25a)の原初痕跡(t_1)は、embd. T (あるいは、embd. Agr)によって規範主要部統率される。中間痕跡(t_1^1)は、embd. Cが主要部統率に関するRMBとならないと仮定すれば、matrix V (あるいは、T (Agr))に規範主要部統率される。¹⁸⁾中間痕跡(t_1^2)は、SPEC-HEAD Agreementによって同一指標となるC₁によって規範主要部統率される。註(13)で前提したように、痕跡(t_j)はembd. C₁によって規範主要部統率される。つまり、(21a)は文法的と予測されることになる。同様の論法は、(25b)中のすべての痕跡が適正統率されると予測する。明らかに、この予測は事実と反する((21b)は非文である)。

この問題は、ある一定の条件下で、LFにおいて長距離移動するWH要素の中間痕跡の削除が可能だと前提することによって打開されると考えられる。つまり、一定条件の下での移動経路の連結(Union)が発動すると前提する。具体的には、以下の仮説が設定される。

(26) Hypothesis:

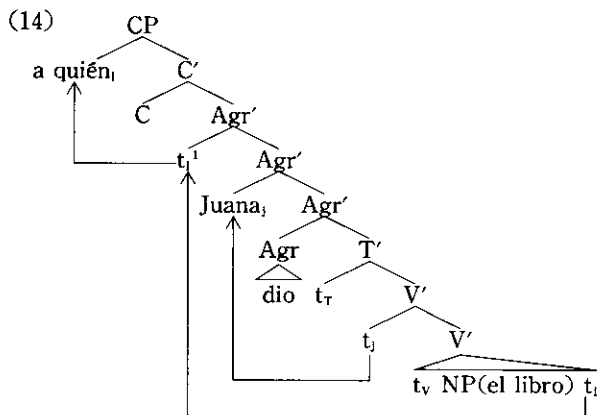
The intermediate trace formed by a long distance adjunction of a WH-element to a matrix Agr' is deleted at LF unless a subject NP adjoined to the matrix Agr' constitutes any RMB.

上の中間痕跡削除が、WH-ArgumentとWH-Adjunctの双方に対して適用される点に留意されたい。結果として、(25a)の中間痕跡(t_1^2)が削除され、移動経路($t_1^1 \rightarrow t_1^2$)と($t_1^2 \rightarrow \text{qué}_{11}$)が連結される(波線で示した移動経路)。

(25b)では、 t_j^1 が削除されるため、移動経路($t_j \rightarrow t_j^1$)と($t_j^1 \rightarrow \text{cuándo}_{01}$)が連結される。(25a-b)の相違は、以下のように説明される。(25a)の t_1^1 は、最終着地点にある*qué*₁₁によって先行詞統率されない(embd. SPEC (C)位置にあるWH要素(*cuándo*₀₁)がRMBとなる)。同様に、(25b)の t_j は、matrix SPEC (C)位置にあるWH要素(*cuándo*₀₁)によって先行詞統率されない。つまり、同定条件である(8b)が満たされない。しかし、Referential Indexを持つWH-Argumentの痕跡は、Bindingによって同定可能である。つまり、(25a)

の *quién*_i が t_i^1 を束縛することにより、(8b)の要件が満たされる。この Binding による同定は、WH-Adjunct には適用されない。結果として、(25a-b) の相違は、適正統率（あるいは、ECP）によって説明可能となる。

ここで、(14) の構造が問題となる（便宜上、再掲する）。(14) において、



中間痕跡 (t_i^1) の削除は許容されない（仮説 (26)）。前述のように、構造 (14) の非文性は、原初痕跡 (t_i) が中間痕跡 (t_i^1) によって先行詞統率されない点に還元される。つまり、原初痕跡 (t_i) は同定条件 (8b) を満足しない。WH-Argument (*a quién*_i) は Referential Index を有する。つまり、Binding による同定が可能である。ここで、原初痕跡 (t_i) が SPEC (C) 位置にある WH 要素 (*a quién*_i) に束縛される、つまり、同定条件 (8b) が満たされると考えてみよう。¹⁹⁾ その場合、中間痕跡 (t_i^1) はどのようなプロセスで同定されるか。 t_i 同様、SPEC (C) 位置にある WH 要素 (*a quién*_i) に束縛されるか、あるいは当該 WH 要素によって先行詞統率されることにより同定条件が満たされる。この論法は、(14) の構造を文法的と予測することになる。しかし、この同定プロセスは許容されるものではない。先行詞統率による同定と Binding (束縛) による同定の違いはあるが、単一要素が複数の痕跡を同定することになる。この種の同定は、以下の仮説に抵触する。

(27) Hypothesis:

An element can identify only one element, whether by Binding or by Antecedent-Government.

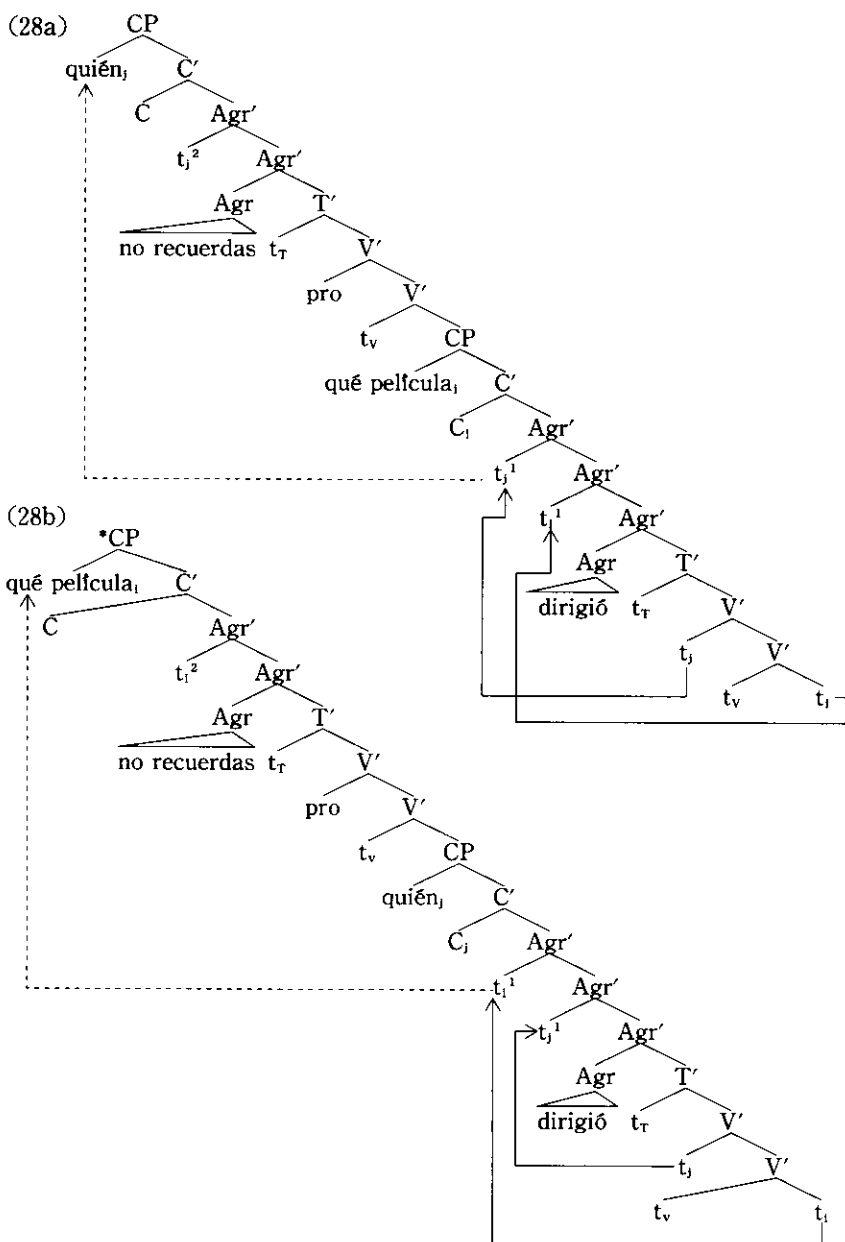
明らかに、(25a) の派生は仮説(27)に抵触しない。

次に、Suñer (1992) の論法が問題を惹起する用例である (24) を検討する (便宜上、再掲する)。

(24) (Torrego 1984: 68-69)

- a. *quién no recuerdas qué película dirigió el en cincuenta y uno?*
'who don't you remember what movie directed in '51' ?'
- b. **qué película no recuerdas quién dirigió en el cincuenta y uno?*
'what movie don't you remember who directed in '51' ?'

Suñer (1992) の論法と同様、これまで本稿で設定された仮説群は (24a-b) を共に文法的と予測する (用例 (23) の検討は省略する)。この予測は事実と反する。(24a-b) の S 構造として、以下の (28a-b) が想定される。(28a-b) において、matrix CP の中間痕跡 (t_1^2, t_1^2) は LF で削除される。(28a) の中間痕跡 (t_1^1) は適正統率される。(28b) の中間痕跡 (t_1^1) も同様である。つまり (24a-b) の相違を生み出す要因は、embd. CP 内部にあると考えられる。



また、(28a-b)の双方において、embc. CP中の原初痕跡(t_i , t_j)は適正統率の認可条件(8a)と同定条件(8b)を満足する(痕跡はRMBを構成しないと前提される)。更に、(28a-b)の双方において、中間痕跡(t_i^1 , t_j^1)は適正統率の同定条件(8b)を満たす。結果として、(28a-b)の相違は、当該中間痕跡の認可条件に還元することになる。しかしながら、本稿の仮説群によれば、双方における中間痕跡(t_i^1 , t_j^1)が規範主要部統率されることになる。(28a)において、 t_i^1 と t_j^1 はそれぞれ、embd. C_i とmatrix Agr(あるいは、 $T(V)$)によって規範主要部統率される。(28b)においては、 t_i^1 と t_j^1 はそれぞれ、matrix Agr(あるいは、 $T^0(V^0)$)と C_j によって規範主要部統率される(C が規範統率に対するRMBを構成しないと前提されている)。つまり、これまで設定された本稿の仮説群は、(28a-b)の構造を文法的と予測することになる。この問題は、SPEC-HEAD Agreementの適用によって指標を付与された C による主要部統率に対して規制を設けることにより打開可能と考えられる。つまり、ある特定の条件下で、 C_x による t_x^1 の主要部統率を阻止すると想定することにする。そこで、以下の仮説を設定する。

(29) Hypothesis:

C_x cannot head govern (license) t_x whose path is wholly contained in another t_y 's path.

(28a)において、始発移動経路は部分的共通関係を形成する。(28b)においては、 t_j^1 の移動経路が、 t_i^1 の移動経路に完全包含されている。つまり、(28b)における C_j は t_j^1 を規範主要部統率しない。結果として、(28b)の構造に対応する(24b)は非文と予測されることになる。

次に、間接目的語(IO)が関与する事例を検討する。

(30) a. **qué diccionario no sabías a quién había devuelto Celia?*

(Torrego 1984:47b)

'What dictionary didn't you know to whom Celia had returned?'

b. *a qui no saps què han regalat?* (同上:note 27)

'to whom don't you know what they have given?'

c. **a quién no sabías qué le regalaron?* (Jaeggli 1982:p. 170)

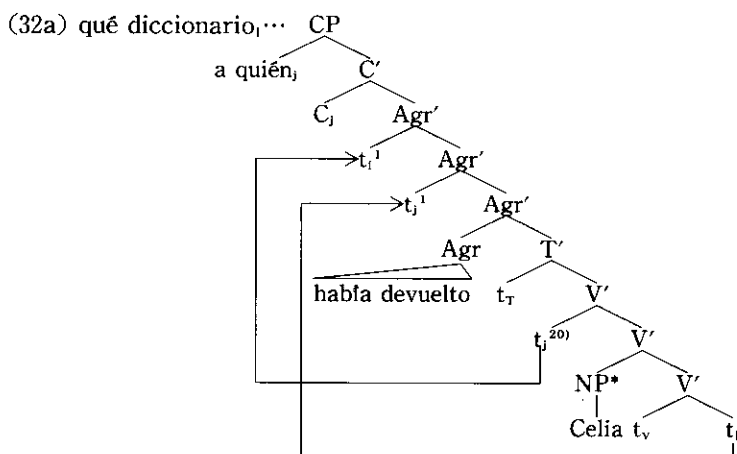
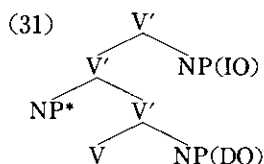
'to whom didn't you know what they had given?'

- d. a cuáles de ellos sabes quién no les dio una buena recomendación?

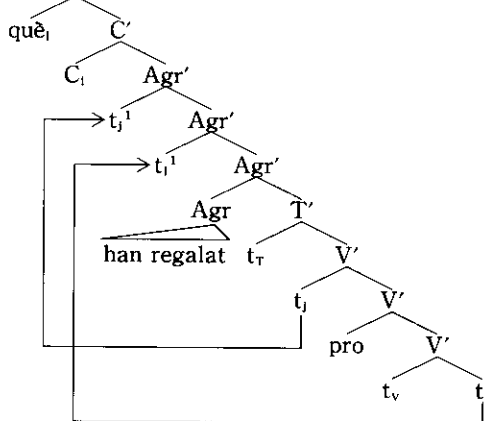
(Suñer 1992:40c)

'to which of them do you know who didn't give them a good recommendation?'

(30b) はカタロニア語の用例である。Torrego (1984:note 27) は、WH 要素移動に関して、スペイン語とカタロニア語が同じ挙動を示すと考えている。よって、Torrego (1984) では、(30b-c) が共に文法的と判断されるであろう。一方、Jaeggli (1982) は当該 (30c) を非文と判断する。Suñer (1992) による用例 (30d) は Torrego (1984) と同様である。つまり、Jaeggli (1982) では、IO が WH の島を越える移動が許容されない。Torrego (1984) と Suñer (1992) ではそれが許容される。上の (30d) の文法性は、IO が主語 NP* の上位位置に基底生成されると前提することにより説明される。また、(30a-b) の相違は、IO が直接目的語 (DO) の上位位置に生成されると仮定することにより説明可能となる。そこで、Torrego (1984) と Suñer (1992) の用例に対して、以下の V 構造を



(32b) a qui_i... CP



想定してみよう. その場合, 以下の (32a-b) が (30a-b) に対応する S 構造となる.

(32b) と異なり, (32a) における t_j^1 の移動経路は t_i^1 のそれに完全包含される. 仮説 (29) により, (32a) 中の t_i は C_i によって規範主要部統率されない. 結果として, 構造 (30a) に対応する (32a) は非文と予測されることになる ((30b) は文法的と予測される). この論法は, (30d) を適切に文法的と予測する (詳細は省略). しかしながら, 上の論法は (30c) をも文法的と予測する. 仮説 (29) が妥当すると前提し, jaeggli (1988) の用例 (33) を勘案すると, 以下の推測が可能となる.

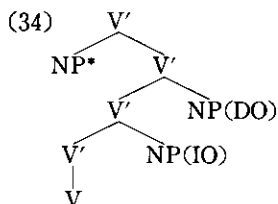
(33) a. *quién no sabes qué compró?* (Jaeggli 1988:45a-b)

'who don't you know what bought?'

b. **qué no sabes quién compró?*

'what don't you know who bought?'

Jaeggli (1982, 1988) の用例では, 主語 NP* が直接目的語 (DO) よりも上位の V' に付加した位置に基底生成される. DO は, 間接目的語 (IO) の上位位置に生成される. 例えば, IO と DO が共起する場合の構造として, 以下の V' 構造が想定される.²¹⁾

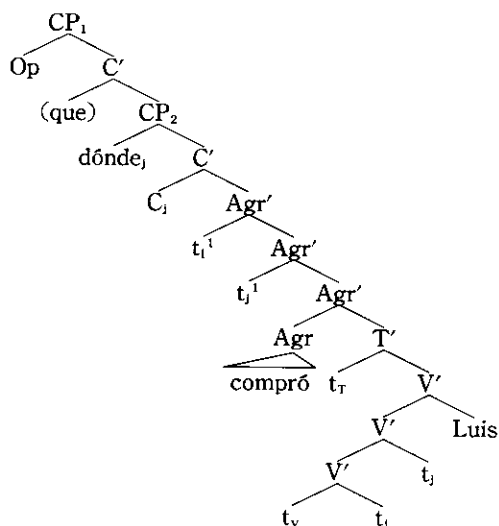


最後に、狭義の間接疑問文 (IQ) の WH 島内部からの移動について考える。前述のように、Suñer (1992) の論法は、当該 WH 島内部からの WH 要素移動を排除する。本稿でも、IQ の CP 構造として (20b) が採用される。²²⁾

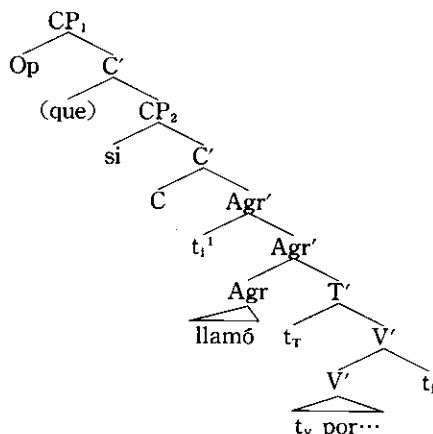
- (35) a. *qué te preguntas dónde compró Luis?(= (22a))
 'what do you wonder where Luis bought?'
 b. *quién preguntaste si llamó por teléfono?(= (22b))
 'who did you ask whether telephoned?'
 b. *por qué se pregunta Juan quién salió?(Aoun 1986:p.127)
 'why does John wonder who left?'
 d. *dónde te preguntas qué puso Juan?(同上:p.126)
 'where do you wonder what John put?'

(35a-b) の S 構造として、以下の (36a-b) が想定される。(36a)において、 t_i^1 の移動経路は t_i^1 のそれに完全包含される。つまり、 t_i^1 は C_1 によって規範主要部統率されない (ECP 違反)。また、 CP_2 の bar 性が順次上位の最大範疇に受け継がれるため、 t_i^1 から matrix Agr' 位置への移動は Subjacency に抵触する。結果として、(35a) は ECP と Subjacency によって排除される。

(36a) *qué_i...*



(36b) *quién_i...*



(36a)と同様に、(36b)のCP₂のbar.性が順次上位の最大範疇に受け継がれるため、*t_i¹*からmatrix Agr'位置への移動はSubjacencyに違反する。仮に、CP₂の主要部と異なり、CP₁の主要部が主要部統率に対するRMBを構成するならば、当該移動は同時にECPにも抵触することになる(詳細な検討は、稿を改める。Suñer (1992)と同様に、CP₁の主要部が音的実現に関係なく空でない(Nonempty)と考えると、当該主要部は主要部統率に対するRMBを構成することになる)。つまり、(35a-b)は非文と予測される。同じ論法は、(35c-d)を

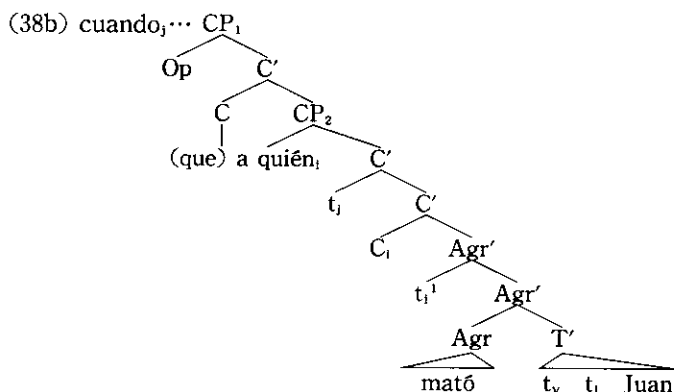
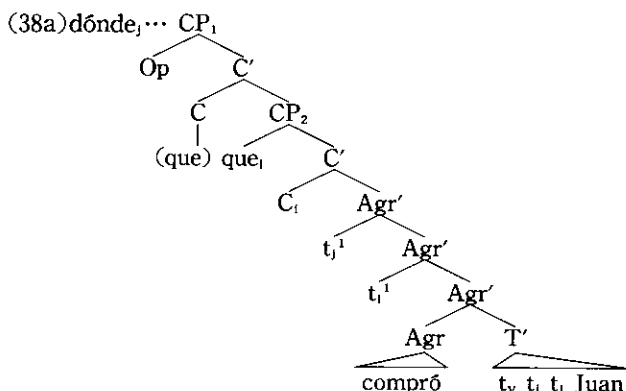
非文と予測する (Subjacency と ECP の双方に違反する)。

5. 結語

以上において, WH 要素が WH 島内部から摘出移動する事例に関する初歩的な考察がなされた。最後に, 本稿の仮説群と Suñer (1992) に対して問題を惹起する用例 (37a-b) を挙げる。本稿の仮説群は, embd.CP が狭義の間接疑問文 (IQ) である (37a-c) をすべて非文と予測する。(37a-b) の文法性判断はどのように解釈されるか。

- (37) a. *dónde te preguntas qué compró Juan?* (Aoun 1986:p.126)
 'where do you wonder what John bought?'
 b. *¿cuándo te preguntas a quién mató Juan?* (同上:p.142 notes 10)
 'when do you wonder who John killed?'
 c. **cómo te preguntas dónde arreglaron el coche?*
 (Kempchinsky 1992: p. 341 note 4)
 'how do you wonder where they fixed the car?'

ここで, 用例 (37a-b) において長距離移動する WH 要素 (*dónde, cuándo*) が embd.V によって下位範疇化されない指示的 WH-Adjunct (Referential WH-Adjunct) である点に留意されたい。また, (37a) の文法性と, embd.V によって下位範疇化される WH-Adjunct が長距離移動する (35d) の非文性を比較する必要がある。(37a-b) の S 構造として, 以下の (38a-b) が想定される。



CP₁の主要部が主要部統率に対するRMBを構成すると前提した場合、(35d)は、SubjacencyだけでなくECPによっても排除される。それは、*dónde*の中間痕跡が適性統率の認可条件（規範主要部統率）と同定条件（先行詞統率）のどちらも満足しないためである。ここで、*emdb.V*に下位範疇化されない Referential WH-Adjunct に関し、CP₁の主要部が主要部統率のRMBを構成しないと考えてみよう。更に、当該 Referential WH-Adjunct が Binding によって同定可能と想定してみよう。この場合、WH-Adjunct (*dónde*, *cuándo*)の(中間)痕跡は、適性統率の認可条件と同定条件を満足することになる(ECPが満たされる)。結果として、(37a-b)はSubjacencyのみに抵触することになる。しかしながら、この論法は(37a)と(37b)の相違を説明しない。本稿では、仮に以下のように考える。少なくとも、ある方言グループにおいて、Vに下位範疇化されない Referential WH-Adjunct (*dónde*)に関し、IQ用例中のCP₁の主要

部が主要部統率の RMB を構成することはなく、当該 Adjunct が Binding によって同定可能である。この前提より、(37a) は Subjacency のみに抵触する。一方、(37b) は、ECP と Subjacency に違反することになる。²³⁾

(37a-b) が提起する問題を更に検討し、本稿の仮説群の修正・廃棄が必要とされることは言うまでもない。

註

- 1) 紙面の都合上、Torrego (1984) の検討はなされない。Torrego (1984) の問題点に関しては、石岡 (1990) を参照されたい。
- 2) 英語とフランス語における [+Finite] Agr は [-Lexical] と指定される。以下の定義 (i) で示されるように、Contreras (1991) によれば、この [±Lexical] Agr は [±pro drop] と相関するものである。
(i) *pro* can be identified under government by a lexical Agr.
(Contreras 1991:25)
- 3) 本稿では、VSO 語順に対する規制を取り扱わない (cf. 註(6))。当該規制に関しては、Contreras (1991: pp. 71-75) を参照されたい。
- 4) Frampton (1990) でも、類似の移動、つまり IP への移動が前提される。後述するように、Suñer (1992) は、Frampton (1990) に立脚してスペイン語における WH 島内部からの WH 要素移動を説明する。
- 5) 本稿の以下の議論には関与しないが、Agr によって下位範疇化される範疇 (TP, T') の主要部の素性 [±Lexical] が問題になるであろう。本稿では、Contreras (1991) と同様に、T が素性 [+Lexical] をもつと考えて論を進める。
- 6) 以下の (i) で示されるように、Contreras (1991) は (3b) の VSO 語順を非文と判断する。しかし、この判断は Gill Gaya (1961) の (ii) の判断 (文法的) に衝突する。
(i) VSO is possible in Spanish except in matrix declaratives.
(ii) *trajo el criado una carta para mí* (Gili Gaya 1961: p. 88)
- 7) (8a) は non pronominal empty category に対する認可条件 (Licensing Condition) であり、(8b) は当該空範疇に対する同定条件 (Identifying Condition) と理解される。指示的指標を持つ要素に対しては、束縛 (Binding) による同定も可能である (これに関しては、後述する)。主要部統率の定義と、主要部統率に関する RM については後述する。Contreras (1991) では、(8b) は以下の (i) のように規定される。
(i) *X is antecedent-governed, unless α is a θ -governed WH-trace.*
後述するように、本稿で対象となるスペイン語の WH 要素移動では上の *unless...* 条件が影響を及ぼさないため、本稿での当該条件の検討は省略する。また、(8) による連言的 ECP 定義は、Roberts (1993: p. 30) による。
- 8) 定義(9)によって規定される Potential Governor を Relativized Minimality Barrier (RMB) と呼ぶことにする。
- 9) Contreras (1991) の論法が妥当ならば、スペイン語には Topicalization が存在しないことになる。よって、従来 Topicalization の事例と考えられていた以下の (i) のような用例は、移動を伴わない Left Dislocation の事例と考えなければならない。
(i) *dinero no creo que tengan* (Contreras 1991: 8)
'money I don't know they have'
- 10) (6) のように、NP が Agr' 位置へ付加移動する場合に当該 Agr' に付加移動している主

語 NP と基底生成された位置にある主語 NP* の双方が RMB を構成する点に留意されたい。後述するように、WH 要素が Agr' 位置に付加移動する場合には、当該 Agr' に付加移動している主語 NP が RMB となる。基底生成された位置にある主語 NP* は WH 要素の Agr' 位置への移動に対する RMB を構成しないと前提される。

- 11) Contreras (1989, 1991) は、(13) の相違を Closed Domain Condition (CDC) によって説明する。CDC より、以下の疑問文と関係文での相違が説明される。(紙面の都合上、CDC の検討は省略する)。
 - (i) a. *qué_i María compró t_i? (Contreras 1989: 7a-b)
b. qué_i compró t_i María 'what did Mary buy?'
(ii) a. el libro Op_i que María compró t_i (Contreras 1989: 8a-b)
b. el libro Op_i que compró t_i María
'the book that Mary bought'
- 12) 本稿の仮説は、主語 NP* が V' に右方付加した位置に生成される用例 (i) を文法的と予測する。
 - (i) a. quién dio el libro Juana?
- 13) Goodall (1992: p. 179) と Rizzi (1990: p. 14 and Section 2.4) は、付加語 (*por qué*) が SPEC (C) 位置に基底生成され则认为。本稿の前提は問題を惹起するように思われる。この場合、適性統率の定義 (8a) の規範主要部統率の要件から「規範」部分を削除する必要がある。本稿では、主要部統率を (i) のように定義する。
 - (i) Head Government: X head governs Y iff
 - (i) a. X is a head
b. X m-commands Y
 - (ii) X = {[±V ±N], Agr, T, empty C coindexed with Y}
 - (iii) a. no barrier intervenes
b. Relativized Minimality is respected. (adapted from Rizzi(1990))

SPEC-HEAD Agreement により、*por qué* と同一指標の C_i が痕跡(t_i)を主要部統率するが、規範統率(右方向統率)することはない。本稿では、C'位置に生成可能な要素が当該CのSPEC位置へ移動する場合には、本稿定義(8a)の「規範的」(*canonically*)が削除され则认为(この問題は、稿を改めて検討する)。C_xによる規範的主要部統率に対する規制については後述する。
- 14) 当該分類についての詳細は、Suñer (1992)を参照されたい。IP, VP等の表示は、Suñer (1992)に従う。Frampton (1990)における定義体系を以下に示す。
 - (i) Definition of Head Government (Frampton 1990: P. 62):
X head-governs Y if X is a head that s-governs Y and there are no nonempty heads that intervene between X and Y.
 - (ii) Definition of S-Government (同上: P. 61):
X s-governs Y if X m-commands Y and there are no barriers for Y that separate X from Y.
 - (iii) Definition of Head Government Condition on Adjunction (AGGA) (同上: P. 53):
A WH-element can only be adjoined to a maximal projection XP from a position that is canonically governed by the head of XP.
- 15) WH-Adjunct (*cuándo*)の生成位置は、本稿でのそれと異なる(Suñer (1992)では、少なくとも、IPよりも下位に生成される)。
- 16) SIは、embd. SPEC (C)位置(具体的には、(20a-b)のWH位置)に生成され则认为

えている (Suñer (1992: p.298)). 本稿でも、同様の前提がなされる。

- 17) ECP は LF で適用されると考える。
- 18) 以下は、主要部統率に関する RMB の定義である。本稿では、(ii) の定義が採用される。
 (i) Z is a typical potential head governor for $Y = Z$ is a head m -commanding Y .
 (Rizzi 1990: p. 26)
 (ii) Z is a typical potential head governor for $Y = Z$ is a head m -commanding Y .
 ($Z \neq \text{empty } C$).
- 19) 中間痕跡 (t_i) による原初痕跡 (t_i) の Binding は許容されないと想定する。
- 20) t_i は V の右方位置に生成されるが、移動経路関係を明示化するために V' の左方位置に表記する。
- 21) 構造 (34) が妥当するならば、 $V + NP (DO) + NP (IO)$ は、 $NP (IO)$ の V' への付加移動によって生成されることになる。
- 22) 他の WH-Adjunct と異なり、*dónde* は C' に付加した位置に生成されることはない。
 (Agr' よりも下位の位置に基底生成される)。
- 23) (37a) が完全に文法的であるならば、当該用例中の CP_2 が bar を構成しないと考えるなければならない。この bar 性の相殺を始発移動経路関係と関連させることが可能であるかも知れない。(37a) の両始発移動経路は Overlap するが、(37b) ではそうではない (更なる検討が必要)。

参考文献

- Aoun, J. (1986). *Generalized Binding: The syntax and Logical Form of Wh-Interrogatives*. Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986). *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Contreras, H. (1989). "Closed Domains." *Probus* 1-2, 163-180.
- Contreras, H. (1991). "On the positions of Subjects." Rothstein, S (ed.) *Syntax and Semantic 25: Perspectives on Phrase Structure, Heads and Licensing*. Academic Press, London.
- Frampton, J. (1990). "Parasitic Gaps and the Theory of Wh-Chains." *Linguistic Inquiry* 21-1, 49-77.
- Fukui, N. and M. Speas (1986). "Specifiers and Projection." *MIT Working Papers in Linguistics* 8, 128-172.
- Gili Gaya, S. (1961). *Curso Superior de Sintaxis Española*. Vox, Barcelona.
- Goodall, G. (1992). "On the Status of SPEC of IP." *WCCFL* 10, 175-182.
- Groos, A. and R. Bok-Bennema (1986). "The Structure of the Sentence in Spanish." Bordelois, I., H. Contreras, and K. Zagana (eds.) *Generative Studies in Spanish Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Harmer, L. C. and F. J. Norton (1973). *A Manual of Modern Spanish*. University Tutorial Press, London.
- Jaeggli, O. (1982). *Topics in Romance Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, O. (1988). "ECP Effects at LF in Spanish." Birdsong, D. and J.-P. Montreuil (eds.) *Advances in Romance Linguistics*. Foris, Dordrecht.
- Kempchinsky, P. (1992). "An Adjunct Extraction Paradox in Spanish." Laeuffer, Ch. and T. A. Morgan (eds.) *Theoretical Analyses in Romance Linguistics*. John Benjamins, Amsterdam.

- Koopman, H. and D. Sportiche (1991). "The Position of Subjects." *Lingua* 85, 211-258.
- Kuroda, S.-Y. (1998). "Whether We Agree or Not A Comparative Syntax of English and Japanese." *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
- Ouhalla, J. (1990). "Sentential Negation, Relativized Minimality and the Aspectual Status of Auxiliaries." *The Linguistic Review* 7, 183-213.
- Ouhalla, J. (1991). *Functional Categories and Parametric Variation*. Routledge, London and New York.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Roberts, I. (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*. Kluwer, Dordrecht.
- Rochment, M. and P. Culicover (1990). *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Sportiche, D. (1988). "A Theory of Floating Quantifier and Its Corollaries for Constituent Structure." *Linguistic Inquiry* 19, 33-60.
- Suñer, M. (1992). "Indirect Questions and the Structure of CP: Some Consequences." Campos, H. and F. Martínez-Gil (eds.) *Current Studies in Spanish Linguistics*. Georgetown University Press, Washington, D. C.
- Torrego, E. (1984). "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects." *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- 石岡精三 (1990). 「Torrego (1984) の再解釈—障壁理論の観点から—」
長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』4号, 79-100.